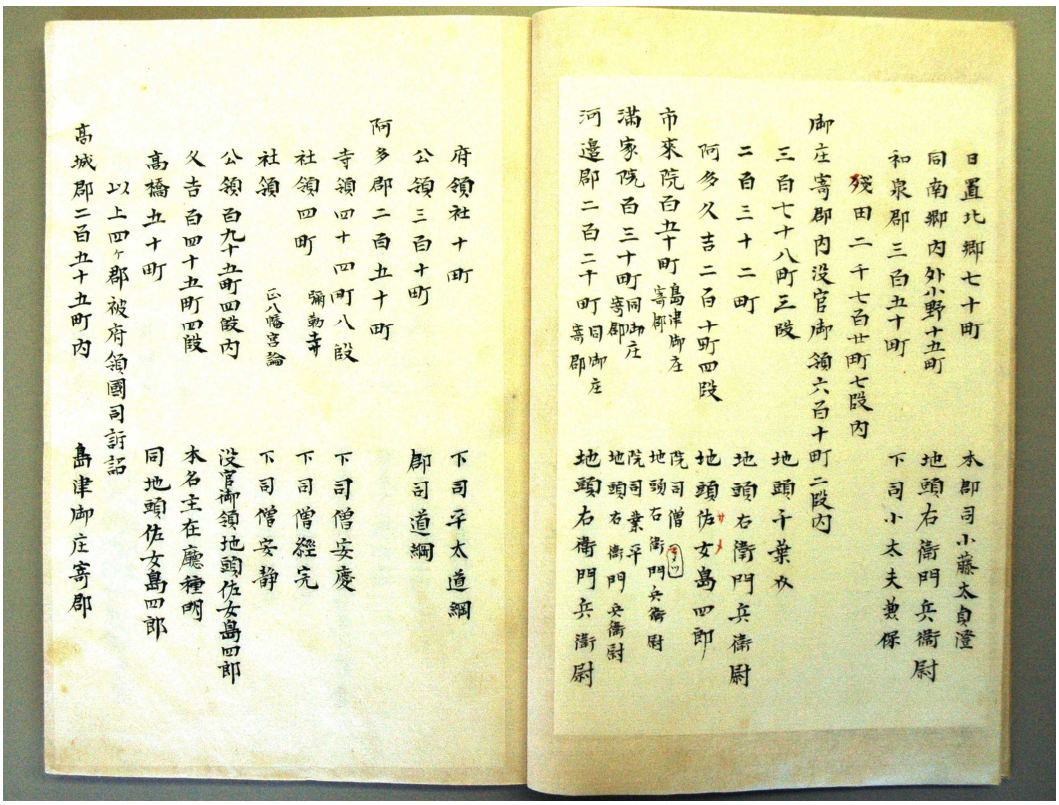
島津荘（しまづのしょう）と近衛家　パネル解説1

正応４年(1291)頃に記された島津荘荘官等申状（『旧記雑録』前編893）によれば、島津荘は、万寿年間(1024～1028)に「開発」され、当時後一条天皇の関白であった藤原頼通に寄進された「無主荒野の地」に始まる。この地は、日向国諸県郡島津（現在の宮崎県都城市郡元付近）を中心とする地域と推定されているが、都城盆地における平安時代～中世初頭の遺跡の分布状況などから、島津荘立荘の場所は全くの「無主荒野」ではなく荒廃耕地であった可能性が指摘されている。

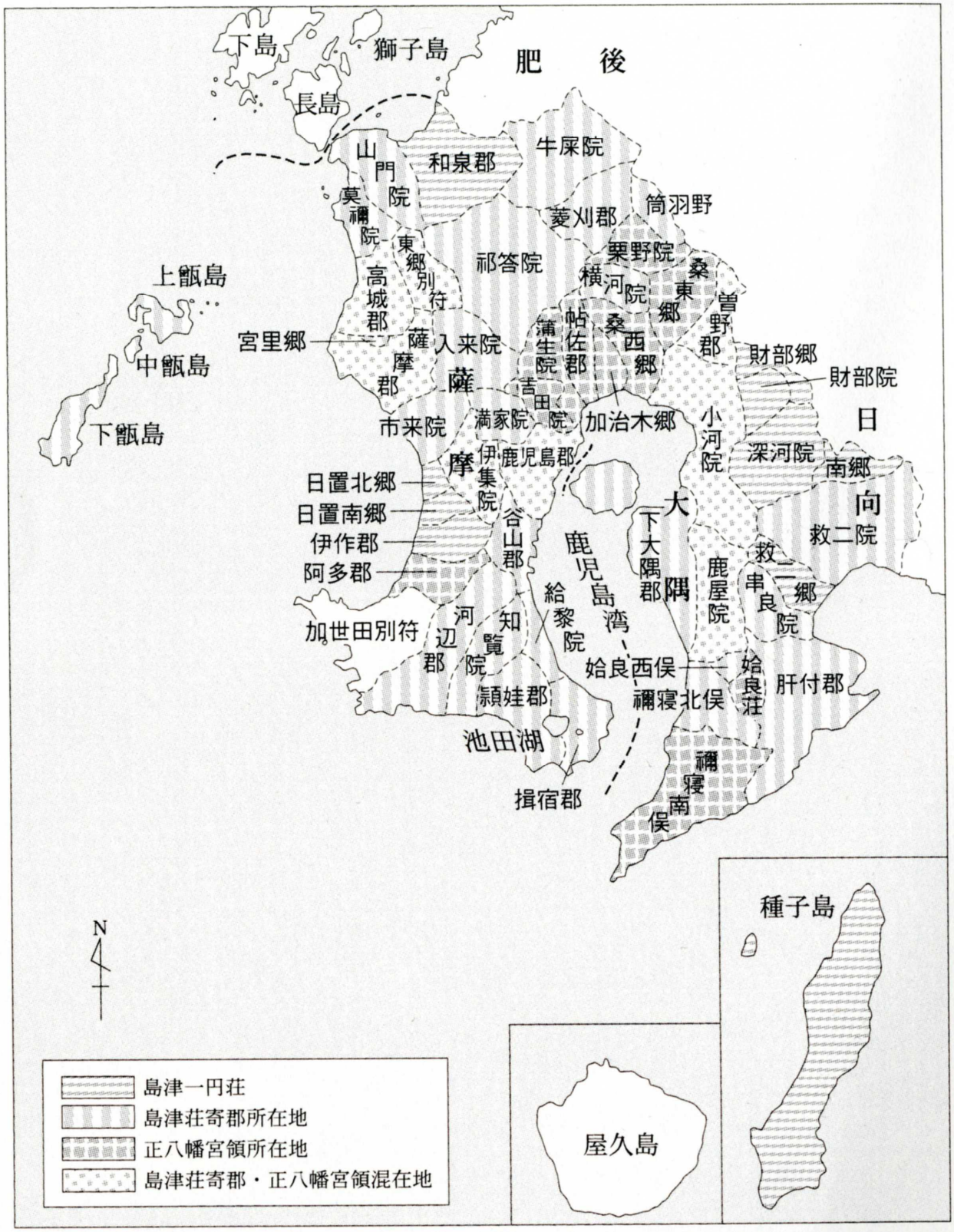
12世紀に島津荘の荘域は大きく広がり、建久図田帳（建久８年（1197）に鎌倉幕府が九州諸国へ命じて作成させた土地台帳）によれば、島津荘の面積は薩摩・大隅・日向３カ国の総田数（そうくじ）の半分以上を占めるまでになった。その荘域は、一円荘（所当〈年貢〉・雑公事といった荘園からの税は荘園領主におさめられる）と寄郡（より(よせ)ごおり）(所当を二分して国司と荘園領主に、雑公事を荘園領主におさめる特殊型半不輸領）からなっていた。



建久８年６月日薩摩国図田帳写（玉里文庫所蔵「図田注文」）

しまづのしょう

島津荘と近衛家　　パネル解説1

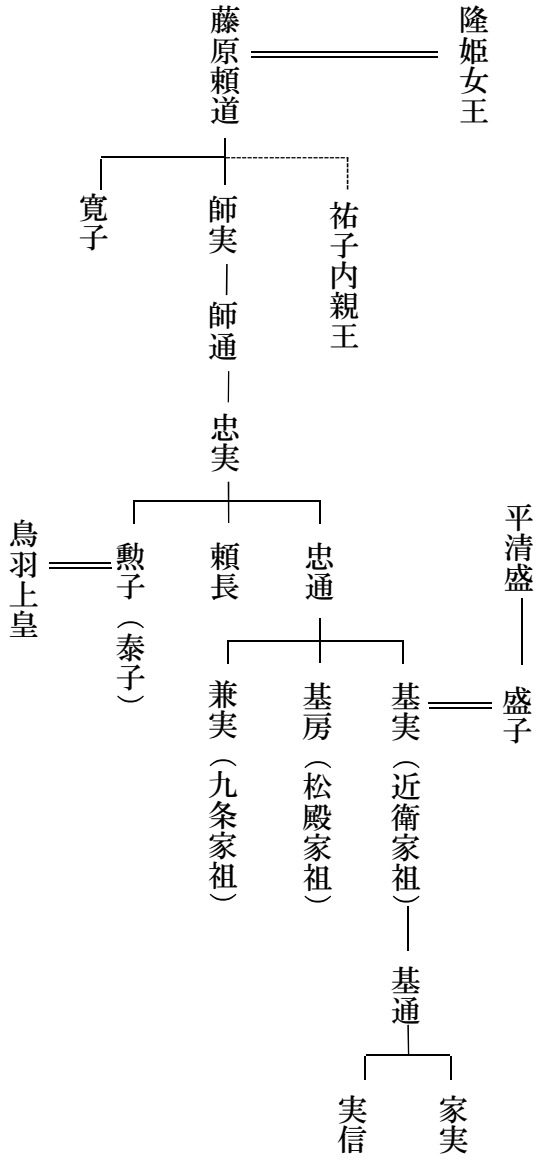


図版引用：原口泉ほか著『鹿児島県の歴史』第２版　山川出版社 2011

しまづのしょう

島津荘と近衛家　パネル解説2

島津荘の本家としての頼通の領有権は、女子（頼通娘の藤原寛子、あるいは頼通妻の隆姫女王を経て頼通養女の祐子内親王）に相続されたのち、藤原忠実（頼通の曾孫）の手に渡り、高陽院（忠実娘の藤原勲子〈改名後は泰子〉、鳥羽上皇后）領の一つとなって、近衛基実（忠実の孫）に伝わる。そして、平氏による摂関家領押領事件（1166年の基実の急死後、摂関家領が基実正妻の平盛子の所領とされ、彼女の父である平清盛が事実上管理することになった）や文治争論（1186年に起こった摂関家領荘園群をめぐる近衛家と九条家の争い）などを経て、島津荘を含む高陽院領は近衛家領として確定された。



島津荘（しまづのしょう）と近衛家　パネル解説3

島津荘は、本家の下で領家が支配する荘園であった。元暦２年（1185）８月17日源頼朝下文（『島津家文書』文書番号３）には、「領家大夫三位家の下文（くだしぶみ）の状に任せ」て、島津氏初代の忠久を島津荘下司職に補任する旨が記されている。この「大夫三位」とは、摂関家の有力家司であった藤原邦綱の娘成子と推定される。彼女は興福寺一乗院に入室した実信（近衛基通の息子）の乳母（めのと）であり、島津荘の領家を含む彼女の所領は実信に伝えられて一乗院領となった。一方、忠久が補任された島津荘下司職は、翌文治２年（1186）までに地頭職に転化している。
忠久が建仁３年（1203）の比企の乱（鎌倉幕府の有力御家人であった比企能員とその一族が北条氏によって滅ぼされた事件）に縁座したため、それ以降の鎌倉時代においては、島津氏は島津荘大隅方・日向方惣地頭職を失っていた。しかし、建武新政の下、島津氏５代の貞久は、島津荘大隅方一円荘惣地頭と同寄郡預所に任命されたと見られる。近衛家や一乗院による島津荘領有が史料上確認できなくなる室町期には、島津氏は内訌や国人一揆に直面しつつも、三カ国（薩摩・大隅・日向）守護として領国支配を安定化させていくのである。

その島津氏が再び近衛家に接触してきたのは、延徳元年（1489）のことであった。島津忠昌（島津氏11代）に仕える村田経安が、近衛政家（近衛家13代）を訪ねたのである。経安は、「島津」から「家門の由緒」にもとづいて政家のところに祗候するよう命じられたと述べており、それを聞いた政家のほうも「そもそも島津荘は近衛家の根本家門領であり、島津氏はその旧好を存じているのだろうか」と推量している（『後法興院記』延徳元年11月17日条）。かつての島津荘の領有体系上の関係を拠り所として、近衛家と島津氏の縁が復活したのである。

近衛信尹の薩摩下向　パネル解説4

近衛家と島津氏の縁を語る上で、近衛信尹（近衛家17代当主）の名前は逸することができない。父前久も天正3年（1575）から5年にかけて織田信長の要請を受けて九州の諸大名と和議を結ぶために薩摩を含む九州各地を回ったことがある異色の公卿で、島津義久に古今伝授を行なうなど薩摩との縁も浅からぬものがあるが、信尹は坊津～鹿児島に流されていた3年の間島津義久の厚遇を受け、義久主従を初めとする地元人士との交流を通じて薩摩の地方文化の隆盛に大きく寄与した。

坊津滞在中に詠んだ坊津八景の和歌は特に名高い。和歌のほか、連歌、絵画にその才を発揮していたが、とりわけ書に優れ、父の能くした青蓮院流（御家流）を出て一流を成し、その独特の書体は信尹の号を取って三藐院流（近衛流とも）と称された。寛永の三筆の一人（他は本阿弥光悦と松花堂昭乗）。

このえ のぶただ
近衛信尹略歴　パネル解説5

永禄8年（1565）11月1日に近衛家16代当主の前久の子として出生。天正5年（1577）閏7月12日に13歳で元服。加冠役を務めた織田信長により「信」の一字を与えられ、信基（のぶもと）と名乗る。10年（1582年）6月2日に本能寺の変により信長が自殺すると、父前久は落飾・出奔。信尹は家督を相続して信輔（のぶすけ）と改名。13年5月10日には21歳にして左大臣に昇るも、内大臣羽柴秀吉の論功行賞を巡り、左大臣を秀吉に譲り翌年に前左大臣の立場で関白に任ぜられることを嫌った信尹は、半年前に関白に就任したばかりの二条昭実（あきざね）に対し関白職を譲ることを求める。この要求はとうてい昭実の受け入れられるものではなかったため、双方譲らず、議論は泥沼化する。所謂関白相論である。遂には秀吉の介入を招くことになり、秀吉が近衛前久の猶子となって関白に就任するという、信尹にとっては最悪の結果となる。19年（1591）に秀吉の甥である秀次が関白となるに及び、信尹の鬱屈は頂点に達し、翌年正月28日に左大臣を辞し、30日に京都を出奔、肥前名護屋に下向して秀吉に対し自らの朝鮮渡海を求めるに至る。もちろんこの望みは叶えられることはなく、文禄2年（1593）3月には帰京させられたが、翌年4月11日に後陽成天皇の勅勘（ちょっかん）を蒙り、薩摩坊津に左遷された。これには関白秀次の意向が強く働いていたようである。4年7月に秀次事件により秀次が除かれるや信尹の謫所（たくしょ）も鹿児島に移され、秀吉より在国料二千石を贈られている。慶長元年（1596）4月には勅勘が解かれ、7月10日に鹿児島を出発、9月15日に帰京した。翌年6月1日に信尹と改名、10年（1605）7月23日には念願の関白に就任し、19年11月25日に薨去（こうきょ）した。享年50歳。極官は従一位関白左大臣。

近衛信尹・薩摩下向関連年表
（『三藐院記』『信尹坊津紀行記別記』等に拠る）

パネル解説6

文禄3年（1594）　4月11日	勅勘を蒙り薩摩坊津への配流が決まる。
〃　（〃）　〃 14日	四十五名の供を引き連れ京都を出立。東寺まで島津忠恒が見送る。東寺で細川幽斎と合流。
〃　（〃）　〃 15日	山城淀で細川幽斎と別れ、船に乗り尼崎に到着。
〃　（〃）　〃 16日	海舟に乗り換えて尼崎を出発。
〃　（〃）　〃 24日	豊後佐賀関（現大分県大分市佐賀関）に到着。島津義久に使者を送る。
〃　（〃）　5月 5日	日向都城（現宮崎県都城市）に到着。北郷時久・忠虎父子の歓待を受ける。
〃　（〃）　〃 8日	大隅海潟（現鹿児島県垂水市海潟）に到着。風待ちのため18日まで逗留。『三国名勝図会』巻44に同地の江之島・袖の浦の地名を信尹が命名したとの記事あり。
〃　（〃）　〃 19日	薩摩山川（現鹿児島県指宿市山川）に到着。唐船を見物。
〃　（〃）　〃 20日	唐船の琉球人と小宴。薩摩頴娃（現鹿児島県南九州市頴娃町）に到着。
〃　（〃）　〃 21日	薩摩坊津（現鹿児島県南さつま市坊津町）に到着。
〃　（〃）　6月2日	信長十三回忌供養のため一乗院にて焼香。前日に三百疋寄進。
〃　（〃）　8月4日	鹿児島より連歌師の高城珠長が来訪。連歌五十韵（5～6日）。
文禄4年（1595）　1月17日	島津義久より書状と贈り物来る。
〃　（〃）　8月 1日	秀吉より謫所を坊津から鹿児島に移すとの書状が届く。
〃　（〃）　〃 28日	坊津を出発し鹿児島に向かう。
〃　（〃）某月14日	伊集院忠棟の館にて茶の湯。
〃　（〃）某月10日	島津義弘の館にて茶の湯。
文禄5年（1596）　7月10日	帰京を許され鹿児島を出発。大隅浜市（現鹿児島県霧島市隼人町浜之市）に到着。島津義久の歓待を受ける。
〃　（〃）　〃 11日	島津義久の館にて歌会。晩に乱舞。
〃　（〃）　〃 12日	座敷能を楽しむ。
〃　（〃）　〃 13日	座敷能。晩に乱舞。信尹自ら舞（二人静）、太鼓（老松）。島津義久より贈り物。
〃　（〃）〃　16日	日向庄内（現宮崎県都城市荘内町）に到着。伊集院忠棟の館に逗留（～23日）して歓待を受ける。
〃　（〃）　〃 20日	島津義久来る。座敷能を楽しむ。
〃　（〃）　〃 21日	座敷能。暁まで宴会。島津義久自らワキ（定家）を演ず。
〃　（〃）　〃 22日	島津義久帰城。伊集院忠棟に茶を振舞う。
〃　（〃）　〃 24日	庄内を出発し、日向志布志（現鹿児島県志布志市）に到着。
〃　（〃）　9月15日	京都に到着。

近衛家との絆①～亀姫・満姫

パネル解説7

島津家は、江戸初期以来、縁組を島津家内部で執り行っていた。藩祖家久は伯父の島津家当主義久の娘を正室に迎え、その没後は一門の島津忠清の娘を継室とした。2代藩主光久も家臣伊勢貞昌の娘を正室とし、その没後は公家の平松中納言時庸（ときつね）の娘を継室に迎えた。中世以来、近衛家の門流（公家の主従関係／近衛家を主家と仰ぐ家）であった島津家は、同じく近衛家の門流である平松家と門流同士で縁組を行ったことになる。子女もまた、男子は別家して家臣となるか、重臣の養子となり、女子は重臣に嫁入りしたが、子女の数が多ければそれだけでは片付かない。3代藩主綱貴（つなたか）の娘亀姫は関白近衛家久の室となり、その没後は4代藩主吉貴（よしたか）の娘満君が継室となる。この近衛家との縁戚関係は、のちの島津家と徳川家の関係に大きな影響を与えることになる

パネル解説8

近衛家との絆②～天英院・竹姫・茂姫

宝永5年（1708）6月8日、幕府より5代将軍徳川綱吉（つなよし）の養女竹姫と鍋三郎（のち5代藩主継豊（つぐとよ））の縁組の打診があったが、幼さを理由に断ることになる。ところが、享保14年（1729）4月6日、再び竹姫を継豊の後室にとの打診を受ける。この縁組の実現に、大奥の天英院が動く。天英院は6代将軍徳川家宣（いえのぶ）の正室であり、その父は太政大臣近衛基凞（もとひろ）であった。すなわち、島津吉貴は天英院の甥の舅という関係になる。天英院からの強い要請があったことは想像に難くない。同年6月に縁組が実現することになる。

その竹姫は、島津家と徳川家の関係を深めるため、6代藩主宗信と尾張藩主徳川宗勝の娘房姫を婚約させ（房姫の輿入れ前に宗信が死去）、義理の孫で8代藩主重豪（しげひで）の正室に一橋徳川家当主宗尹の娘保姫を迎えさせ、さらに遺言による重豪の娘茂姫と一橋治済（はるさだ）の長男豊千代（のち11代将軍徳川家斉（いえなり））の縁組が行われた。10代将軍家治（いえはる）の急死により、家斉が11代将軍の座に就くことになると、将軍家御台所（みだいどころ）に相応しい格式を持つため、茂姫は近衛家の養女となり、その後、家斉と茂姫の婚儀が執り行われた。

近衛家との絆③～郁姫・貞姫・篤姫

パネル解説9

9代藩主斉宣（なりのぶ）の娘郁姫は、文政8年（1825）に関白近衛忠凞（ただひろ）と婚約。父斉宣が隠居の身であったため、兄で10代藩主斉興（なりおき）の養女となって近衛家に嫁ぐこととなった。忠凞との間に忠房をもうけ、その忠房は甥で薩摩藩11代藩主斉彬（なりあきら）の養女貞姫を正室に迎えている。さらに、斉彬の五女寧姫は忠凞の養女となり、のちに12代藩主茂久（のち忠義）の継室に迎えられる。

嘉永3年（1850年）、幕府より御台所候補の打診が島津家へあった。13代将軍家定（いえさだ）の正室を鷹司家、ついで一条家に奪われた近衛家は、この幕府の意向に乗ろうと考える。斉彬は養育していた一門今和泉家島津忠剛（ただたけ）の娘一子（のち篤姫）の実子届を出し、篤姫は近衛家の養女となり、安政3年（1856）12月18日に家定と婚儀を挙げたのである。島津家、近衛家、徳川家、それぞれの思惑が渦巻くなかで、島津家は近衛家を介して2人の将軍家御台所を輩出したのである。

島津氏歴代藩主と近衛家との関係　パネル解説10

歴代藩主		近衛家との関係
2	光久	万治2年（1659）、平松時庸養女（交野貞昌娘）と婚姻
3	綱貴	娘亀姫が関白近衛家久の正室となる
4	吉貴	亀姫没（宝永2年〈1705〉）後、娘の満君が継室となる
5	継豊	享保14年（1729）6月4日、5代将軍徳川綱吉の養女竹姫（清閑寺凞定娘）と婚約。同年12月11日入輿 この縁組の実現にさいし、太政大臣近衛基凞の娘で6代将軍徳川家宣の正室の天英院凞子が尽力
8	重豪	安永5年（1776）7月19日、娘茂姫が一橋治済の長男豊千代（のち11代将軍徳川家斉）と婚約 天明7年（1787）11月15日、近衛経凞の養女となるために茂姫から寧姫と名を改め、経凞の娘として家斉に嫁ぐさい、名を再び改めて「近衛寔子」として、寛政元年（1789）2月4日に婚姻
9	斉宣	文政8年（1825）、娘郁姫が関白近衛忠凞と婚約 「島津興子」と名を改めて嫁ぐ 忠凞との間に一子忠房をもうける
11	斉彬	養女貞姫（島津久長娘）が左大臣近衛忠房の正室となる 虎寿丸（儔次郎）が近衛忠凞の娘信君と婚約する手筈であったが、嘉永7年（1854）閏7月24日に虎寿丸の死去により破談 娘寧姫（寧子）が近衛忠凞の養女となる 嘉永6年、今和泉島津家・島津忠剛の娘一子が、島津斉彬の養女となり（篤子と改名）、安政3年（1856）4月に近衛忠凞の養女、同12月18日に13代将軍徳川家定の正室となる
12	忠義	近衛忠凞の養女寧子を継室に迎える

パネル解説11

近衛家との絆④～木村探元と税所敦子

最後に、島津家と近衛家を結んだ2人の人物を紹介しておこう。木村探元（1679-1767）は薩摩藩の御用絵師で、江戸で狩野探信（かのうたんしん）に師事、雪舟にも傾倒し、室町風の水墨画を得意とした。享保19年（1734）家凞（いえひろ）の子家久に招聘されて上京し、半年間ほど京都に滞在した。その間、近衛家のもとで期間限定の御抱絵師（おかかえ）として作画御用をつとめた。税所敦子（さいしょあつこ）（1825-1900）は歌人で、宮家付の武士林篤国の子に生まれ、のちに薩摩藩士税所篤之の妻となる。千種（ちぐさ）有功（ありこと）に桂園派の和歌を学ぶ。28歳で夫に死別したのち、島津家、京都近衛家に仕えた。明治8年（1875）に皇后の歌のお相手として宮中に出仕、亡くなるまでの26年間精勤した。歌日記『心つくし』（1853年）、歌集『御垣の下草（みかきしたくさ）』（1888年）、『内外詠史歌集』（1895年）などがある。